

平成7年12月18日

長野県農政部長

病害虫発生予察特殊報第2号

病害虫名 トルコギキョウ斑点病

病原菌名 *Alternaria* sp

1 発生経過と被害

平成7年2月、長野市のトルコギキョウ栽培ハウスで育苗中の苗に、葉に斑点を生じ、ひどくなる
と葉枯れ症状になる障害が発生した。葉枯れを起こした株は生育遅延が著しく、育苗箱ごと廃棄せざるを得ない状態であった。しかし、発生 of 軽いものは苗の生育に従い回復し、定植は可能であった。

2 病原菌の分離・同定

斑点部分を検鏡したところ、糸状菌の菌糸が観察され、病斑表面には *Alternaria* 属菌特有の分生孢子が確認された。また、常法により病斑部から病原菌の分離を行ったところ、*Alternaria* 属菌が主に分離された。分離菌を培養し、形成された分生孢子をトルコギキョウに噴霧接種したところ、斑点症状が再現され、本菌による病害であることが明らかとなった。

本病の発生は大分県で報告があるが、病原菌の種名については検討していないので、元記載のまま表現した。

なお、本県での発生確認は初めてである。

3 病徴と診断

初め、褐色の小斑点が葉の表面に生じる。この小斑点はやがて融合して大型病斑となり、発生 of 激しいものは葉枯症状となる。一カ所に発生すると周囲の株にも次々と伝染し、斑点症状は拡大していく。聞き取り調査によると、品種的には八重咲きの系統で発生が多く、F1 品種で少ない傾向があった。

また、自家採種した系統が弱く、市販品種では発生が少ないようであった。

4 防除方法

発生原因として、育苗中の多湿が考えられる。また、種子はばらまき栽培であり、苗が込み入った場所で多発している傾向があった。しかし、定植期になり気温が上昇し、苗が大きくなると病勢も収まるようになった。以上のことから、次のようなことを実施する。

- (1) 発生原因の大ききは育苗期間中の管理によると考えられるので、普段から発生に注意し、発生を認めた育苗箱は別に管理する。
- (2) 日中十分換気して、ハウス内の湿度を下げる。
- (3) 発病に品種差があるようなので、多発した場合は品種を変える。
- (4) 本病における登録農薬はないが、病原菌に対して有効な薬剤はあるので、多発しそうな場合は農業改良普及センターと対策を協議する。